

◆【海員随想】シイラ再び② 井上康平

「すれ違う船から、お前ら漁師か！ と指さされるぞ」とだれかが言い

「こんなことしている中型セメント船はほかにいないだろう」とみんなが笑った。

2001年夏、船長がシステム全般を設計し、一機士が施工した可動式竿固定装置を設置したが巨大な敵の出現で道具の完全装備がなされることと成った。

能率運航と遅滞なき予定の消化が至上命令となり、現場からはゆとりが消え、スリム化した船内は渴いた無機質の空間へと姿を変えたころ、須崎を拠点にピストン運航していた頃の話だ

大王崎沖に巨大な敵が出現し、ヒットしても水面に姿を現すことなく道具を持っていかれることが多くなった。毎航海、ケブラの針元を一瞬でボロボロにされ、ナイロンをワイヤーに替えても、容赦なくラインの途中からブチ切られる事実がそこにあった。

まだ見ぬ宿敵の存在は、いつしか、常にクールだった元漁師さえも「絶対に釣ってやる」とまでいわせるほどに成長していった。そして道具は、彼によって大物用に完全整備されることになった。

決戦の時は、意外に早くやってきた。8月9日、快晴、船はいつもと変わらぬ針路で小名浜に向け航行していた。朝の4-8直の三木崎沖でメーターオーバーのシイラを揚げ、大王崎で御前崎方面へ変針して2時間後、あらかじめマークしていたポイント付近で小魚の付いた流木を発見して船を寄せた。大物がいるかもしれない。本船サイド通過直後、緊張と同時にラインが張り切る。だが魚はまだ水面に浮いてこない。

「潜っとるで！」。必死にラインを手繰り寄せる。近くまで来て初めて魚がサワラだと分かった。銀色に輝くスマートなボディは、体長1M60CMの満身に値するサイズだった。「やはり、おぬしであったか！」

突然時代劇モードになって、サワラのギラつく鋭い眼光が悪役スターそのものに見えた。この1カ月余り道具を取られ続けても懲りずに追いつけた執念の結果が、そこにはあった。あっぱれとはこのことだ。

「海員だより」